小学校

平成14年度

教育研究員研究報告書

道　　徳

東京都教職員研修センター

平成14年度

教育研究員名簿

[低学年分科会]

地区名	学校名	氏名
新宿区	新宿区立戸塚第三小学校	△ 立野文雄
世田谷区	世田谷区立駒繋小学校	北澤由香
杉並区	杉並区立高井戸東小学校	岡田仁美
葛飾区	葛飾区立末広小学校	秋山雅子
小平市	小平市立小平第八小学校	○ 大野寿久
東久留米市	東久留米市立第三小学校	菅谷美子

[中学年分科会]

地区名	学校名	氏名
大田区	大田区立道塚小学校	杉田しのぶ
世田谷区	世田谷区立東大原小学校	大丸光子
北区	北区立桜田小学校	◎ 渡辺三枝子
板橋区	板橋区立板橋第七小学校	高橋雪枝
八王子市	八王子市立松枝小学校	後々陽子
青梅市	青梅市立第五小学校	鈴木千栄
稲城市	稲城市立若葉台小学校	△ 村野嘉憲

[高学年分科会]

地区名	学校名	氏名
文京区	文京区立根津小学校	松山隆一
墨田区	墨田区立隅田小学校	植木洋
大田区	大田区立羽田小学校	井村加代子
中野区	中野区立丸山小学校	西野國子
練馬区	練馬区立開進第三小学校	△ 岩波万里子
足立区	足立区立中島根小学校	鈴木愛一郎
葛飾区	葛飾区立川端小学校	齋藤秀明
府中市	府中市立府中第二小学校	石井良子
調布市	調布市立杉森小学校	小畑行広

※ 全体世話人・・・◎　全体副世話人・・・○　分科会世話人・・・△

〔担当〕東京都教職員研修センター統括指導主事　伊津寿美

目　　次

目　　次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

＜全体報告＞

◇　研究主題について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

◇　分科会主題

◇　研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

＜分科会報告＞

Ⅰ　気付いたことや感じたことから一人一人の思いを深める指導と評価の工夫

１．分科会主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

２．研究の構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

３．研究主題に迫る指導と評価の工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

４．実践事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

５．研究の成果と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Ⅱ　友達とのかかわりの中で、互いに認め合う心を育てる指導と評価の工夫

１．分科会主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

２．研究の構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

３．研究主題に迫る指導と評価の工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

４．実践事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

５．研究の成果と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

Ⅲ　自分を振り返り、自他を大切にする心を育てる指導と評価の工夫

１．分科会主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

２．研究の構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

３．研究主題に迫る指導と評価の工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

４．実践事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

５．研究の成果と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

研究主題設定の理由

児童の実態把握を的確に生かした指導と評価の工夫

◇研究主題について

人間は、本来人間としてよりよく生きたいという願いをもっている。この願いの実現を目指して生きようとするところに道徳が成り立つ。道徳教育とは、人間が本来もっているこのような願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動である。道徳教育を充実させ、子どもたちの心を耕していくことは道徳性を高めていく上でたいへん重要なことである。そして、その道徳性の育成は計画的、発展的に図っていかなければならない。

そこで、学校教育全体で取り組む道徳教育のかなめとしてあるのが道徳の時間である。道徳の時間において、人間としての在り方や生き方の礎となる道徳的な価値について学び、自覚を深め、道徳的実践力を育成していくのである。これまでに、道徳の時間のねらいを達成するために、資料の開発、導入の工夫、効果的な発問等の展開におけるさまざまな工夫など指導上多くの研究がなされてきている。

新しい教育課程においては、指導と評価が一体化した評価方法の工夫改善が大きな課題となっている。各教科等では、学習目標の達成状況を評価するために、指導した結果を判断するものさしとして評価規準を明確にし、児童一人一人を正しく理解し、それを次の指導の改善に生かすことにより、指導全体の質を高めようとしている。道徳の時間においても同様に指導に生かす評価が重要であることが明らかである。しかし、道徳の時間の評価は、各教科等とは質の異なる部分もあり、数値などによる評価は行わない。道徳の時間においての評価は、ねらいが達成できているかどうか児童の変化・変容を見取ることと、指導法の適切さを判断すること、の２点が挙げられる。児童変容の見取りとは、人間性の評価ではなく、一人一人の伸びを評価するものである。そのためには、ねらいに応じた児童の実態把握をもとに指導を工夫し、その変化・変容をしっかりと評価することである。そして、それにより児童理解を深めたり次の指導に生かしたりし、より児童一人一人に応じた授業の展開ができるようにしたいと考えた。また、このような指導と評価の一体化により、共感的な児童理解ができ、授業改善につながると考えた。

以上の理由から、本研究主題「児童の実態把握を的確に生かした指導と評価の工夫」を設定した。さらに、以下のように各分科会の主題を設定し、研究主題に迫ることとした。

◇分科会主題

＜低学年分科会＞

気付いたことや感じたことから、一人一人の思いを深める指導と評価の工夫

――― 思いを深める表現活動を通して ―――

＜中学年分科会＞

友達とのかかわりの中で、互いに認め合う心を育てる指導と評価の工夫

――― 考えを深め広げる話し合いを通して ―――

＜高学年分科会＞

自分を振り返り、自他を大切にする心を育てる指導と評価の工夫

――― ワークシートの効果的な活用を通して ―――

◇研究の概要

研究主題　児童の実態把握を的確に生かした指導と評価の工夫

低学年部会	中学年部会	高学年部会
目指す児童像		
気付いたことや感じたことから自分の思いを深め、よりよく生活しようとする子ども	互いのよさや違いを認め、よりよい自分にしようとする子ども	自分を見つめながら自他を大切にし、よりよく生きていこうとする子ども
分科会主題		
気付いたことや感じたことから一人一人の思いを深める指導と評価の工夫	友達とのかかわりの中で、互いに認め合う心を育てる指導と評価の工夫	自分を振り返り、自他を大切にする心を育てる指導と評価の工夫
仮説		
多様な方法から児童の実態を把握し、その実態にあった指導や友達とのかかわりを生かすことで、目指す児童像に迫ることができる。	相手の考えを受け止め、自分の考えを深めたり広げたりする話し合いを重ねることで、目指す児童像に迫ることができる。	さまざまなかかわりの中で、自分を振り返る活動を意図的に積み重ねることで、目指す児童像に迫ることができる。
指導・評価の工夫		
質問など直接的な実態把握の活用	実態把握を指導に生かす工夫	ねらう価値にそった実態調査の工夫と活用
・心に響く資料の選定や提示方法 ・生活体験を生かした授業の展開 ・**思いを表現しやすい発問やワークシートの工夫** ・児童の思いを深める場の工夫	・指導方法の工夫 **話し合いの工夫** （実態把握を生かし、話し合いを支援）	・子どもがじっくり考えられる展開の工夫（発問の工夫・意図的指名、資料の選択等）
自己評価の工夫、（「心のノート」を活用した見取り）	自己評価の工夫（振り返りカード・「心のノート」の活用）	**自己の振り返りの工夫**（質問紙・振り返りカードの活用）
評価の観点の明確化		

検証授業

総合的な評価［指導計画・指導方法・児童の変化・変容］

Ⅰ　気付いたことや感じたことから一人一人の思いを深める指導と評価の工夫

――――　思いを深める表現活動を通して　――――　（低学年分科会）

１．分科会主題設定の理由

（１）　児童の実態を踏まえて

低学年の時期になると、道徳性の基本である自分でしなければならないことができるようになってくる。他人の立場を認めたり、理解したりする能力も徐々に発達してくる。しかし、まだ幼児期の自己中心性が残っており、自分さえよければいいという態度をとる児童もいる。他の人の気持ちを考えて行動するには、まず、多くの人とかかわったり、いろいろな体験をすることが大事である。発達段階から見ると、低学年児童は、知的能力の発達や学校・家庭・地域等における生活体験によって次第に自主性が増し、様々なかかわりを広げていく時期である。

ところが、近年、宅地化等に伴い、児童の遊ぶ場所が限られてきた。また、ビデオやＴＶゲームの普及により、遊びの内容も変わってきた。このような児童を取り巻く生活環境の変化から、他者や自然とのかかわりが希薄になってきている。

他者や自然とのかかわりが希薄になってきているものの、児童は、様々な体験をしながら生活している。そこで、それらの体験を授業に生かし、生きることの尊さに気付いたり、美しいものに感じたり、他の人を思いやったりする心を育てたいと考えた。そして、道徳の時間の指導を通して、児童一人一人の道徳的価値の自覚を促し、自立性をはぐくみながら、道徳性の育成につなげたいと考えた。

（２）目指す児童像に迫るために

低学年の児童にとっては、まず自分の思いをしっかりともつこと、そして、自分自身について気付き理解して考えを深めていくことが大事なのではないかと考えた。そして、子どもたちが日常の生活の中で気付いたり感じたりしたことを基に、授業の中で心に響く資料にふれ、友だちの様々な考えを聞きながら、自分の思いに気付き、「そうだったんだ。」「こういう考えもあるんだ。」と道徳的価値に対する自分の思いを深めていってほしいと考えた。気付き、感じ、深めることなどを繰り返しながら、自己を振り返り、よりよく生活しようという意欲をもっていってほしいと思った。

そこで、「気付いたことや感じたことから一人一人の思いを深める指導と評価の工夫」を分科会主題とした。

本分科会では、低学年児童の発達段階を考えて、評価する場を限らずに児童の実態や変化や変容を見取り、指導し、評価に当たっていくこととした。また、自分の思いを表現しやすい授業を展開すれば、自己評価や教師の見取りもでき、そこからまた新たな指導が進められるのではないかと考えた（指導と評価の一体化）。主題に迫るために、事前の質問紙による実態調査や日記・作文・観察・聞き取りから児童の実態を把握し、一人一人の実態や学級の実態に応じた指導を行うこととした。実態を踏まえ、心に響く資料を選定し提示の方法を工夫したり、思いを表現しやすく分かりやすい発問やワークシート・自己評価などを検討・工夫したりしながら研究を進めていくことにした。

2．研究の構想

研究主題

児童の実態把握を的確に生かした指導と評価の工夫

目指す児童像

気付いたことや感じたことから自分の思いを深め、よりよく生活しようとする子ども

分科会主題

気付いたことや感じたことから一人一人の思いを深める指導と評価の工夫
――― 思いを深める表現活動を通して ―――

仮説

多様な方法から児童の実態を把握し、その実態に合った指導や友達とのかかわりを生かすことで、目指す児童像に迫ることができる

指導と評価の工夫

（1）実態把握の工夫と活用	（2）指導方法の工夫	（3）評価の工夫
①多様な方法で見取る工夫	①資料の選択・提示の工夫	①評価の観点の明確化
②日常の実態把握を指導に生かす工夫	②思いを深める場や表現する活動の工夫	②自己評価を生かす工夫
		③実態把握・指導と評価の一体化

3．研究主題に迫る指導と評価の工夫

（1）実態把握の工夫と活用

①多様な方法で見取る工夫

・直接的な聞き取り、質問紙、日記、作文、観察、「心のノート」など、多様な方法で児童の実態を把握する。

②日常の実態把握を指導に生かす工夫

・授業での様子だけでなく、日常の児童の姿から、ねらいとする価値に関する実態を取り上げ、本時での意図的な指名や個別指導に生かし、道徳性の育成につなげる。

（２）指導方法の工夫

①資料の選択・提示の工夫

・低学年に親しみやすい動物などが主人公となっている資料を通して、児童の興味・関心の高まりにつなげる。

・文章の内容がどの児童も分かりやすいように、資料に応じて紙芝居や切り抜き絵、読み聞かせなどを取り入れた資料提示をする。

・ＢＧＭを流すことで、場の雰囲気に浸ることができるようにする。

②思いを深める場や表現する活動の工夫

・動物のお面を付けて動作化をしたり、役割演技をしたりすることで、登場人物の気持ちを深く考えられるようにする。

・児童の思いを表現しやすい発問やワークシートを工夫する。

（３）評価の工夫

①評価の観点の明確化

・評価の観点を「気付いている」「感じている」「分かっている」「意欲をもっている」として児童の変化・変容や心の状態を見取ることとした。本文会では、いずれか（複数でも）の道徳性について変化・変容が見られることを「一人一人の思いの深まり」と考え、それを見取り、事後の活動につなげていきたいと考えた。

②自己評価を生かす工夫

・児童の心の変容や状態の見取りについては、授業中の発言や観察などの他にワークシートに自己評価項目（質問紙）を取り入れ、選択式で記入できるようにした。低学年では、自己評価は難しい面もあるが、まだ文章で自分の思いを十分に表現しきれない実態もあり、振り返りの場において、比較的有効な方法ではないかと考えた。ワークシートの記述内容と合わせて、心の変化・変容や状態を見取る手立てとした。

③実態把握・指導と評価の一体化

・「実態調査・把握の集計表」（資料Ｐ９参照）を基に指導と評価の一体化を図り、事後の活動に生かすようにする。

・事前の実態把握を的確に指導と評価に生かしながら道徳性を育てるとともに、日常的な道徳的行為の育成につなげるために、次のページのような「評価の観点表」を作成した。本時では、道徳的習慣や行為についての評価は行えないが、事後の手立てとして日常的に励ましや賞賛をすることで、望ましい道徳的習慣・行為の育成を図っていきたいと考えた。

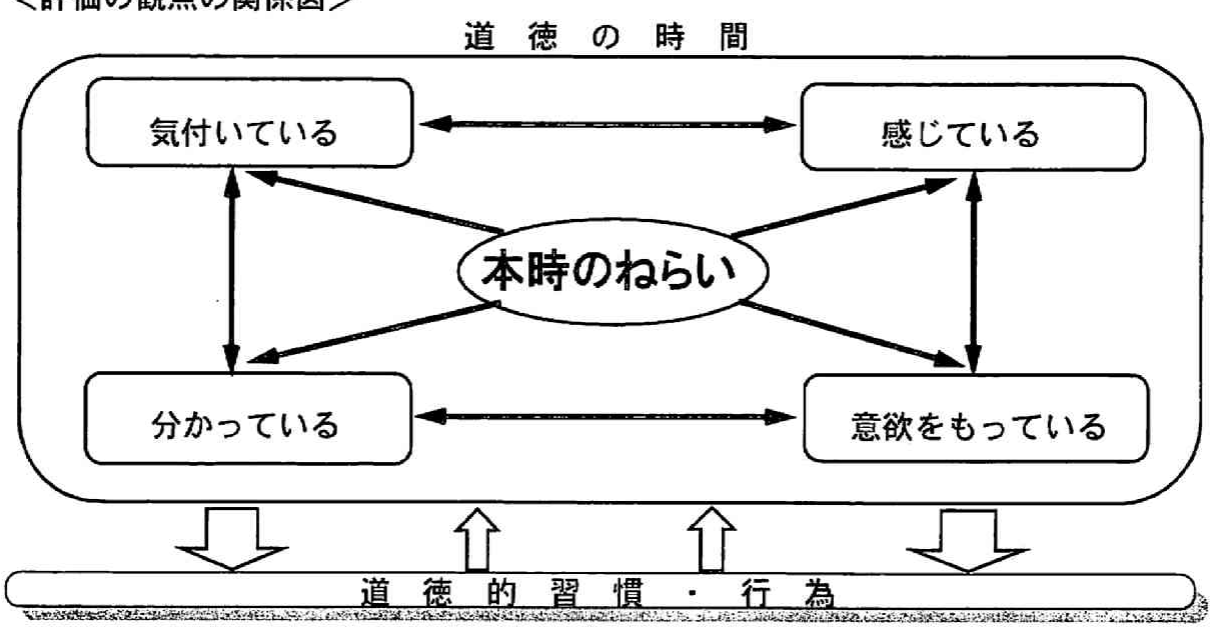
＜評価の観点表＞－－「わきだしたみず」（内容項目1-(2)勤勉・努力）を例として

・ねらい－－－自分がやろうと決めたことは、最後までやり通そうとする態度を育てる。

評価の観点	事前の見取り及び児童の実態（授業中の様子）	見取りに対応した指導の手だて・方法	授業での見取り
●道徳的価値について気付いている	○自分がやろうと決めたことを最後までやり通すことの大切さに気付いている。	○自分がやろうと決めたことを想起できる場を設ける。 ・事前調査 ・展開後段「振り返り」 ・友達の発言 ・自己評価	・事前調査 ・ワークシートへの記述内容 ・自己評価項目 ・発言
●道徳的価値について感じている	○自分でしっかりやることは大切だと感じている。	○主人公の達成感から自分を振り返られるようにする。 ・事前調査 ・展開後段「振り返り」 ・自己評価	・ワークシートへの記述内容 ・自己評価項目
●物事の善し悪しが分かっている	○自分がやろうと決めたことを続けることは、良いことだと思う。 ○まだ、良いことだという考えには至らない。	○自分の判断について考えられるようにする。 ・主人公の行動から ・友達の発言	・ワークシートへの記述内容 ・自己評価項目 ・発言
●価値ある行為をしようという意欲をもっている	○自分がやろうと決めたことを続けていこうとする気持ちをもつ。 ○向上心がまだ育っていない。 ○方法を自分で考え、やり続けようとする。	○勤勉に努力し、さらに向上しようとする気持ちを育てる。 ・主人公の行動から ・ワークシートへの記述 ・友達の発言 ○終末の学習で、実践意欲を高める。	・ワークシートへの記述内容 ・自己評価項目 ・後段の発言

◎日常的に望ましい道徳的習慣・行為が身に付いている	○実践意欲を行動に表している。 ○途中でくじけそうになる。	○励ましや賞賛をする。 ・日常生活の中で、 ・「心のノート」の活用 ・作文や話し合い活動	・日常の観察 ・「心のノート」

＜評価の観点の関係図＞



４．実践事例

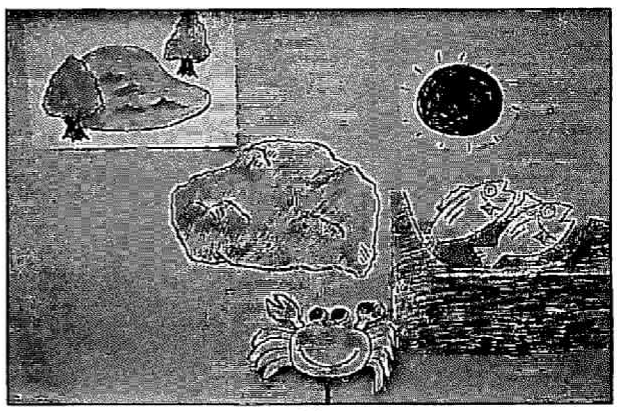
（1）主題名　　がんばる心　（ 第１学年　1―（2）　勤勉・努力 ）
（2）資料名　　「わきだしたみず」
（3）ねらい　　自分がやろうと決めたことは最後までやり通そうとする態度を育てる。
（4）展　開

	学習活動　主な発問と児童の反応	◆評価の観点　　・指導上の留意点
導入	1、池にいる生き物について話し合う。 池にはどんな生き物がいるでしょう。 ・魚、メダカ、ザリガニ、コイ、フナ、	・児童の反応を引き出しながら楽しい池を切り抜き絵により再現していくことで資料の内容へ方向づけていく。
展開	2、資料「わきだしたみず」を場面ごとに捉えながら話し合う。	・場面絵、切り抜き絵を変えたり、カニを見せたりしながら物語のイメージ化を図り、条件状況をおさえる。
	困っている魚たちの様子を見ているカニはどんなことを考えていたでしょう。	
	・さかなたちがかわいそうだな。 ・なんとかたすけてあげたいな。 ・ぼくのちからでなんとかしよう。	・池が渇水し困っている魚たちを思い自分でできそうなことを考えるカニの気持ちを想像できるようにする。
	大きな石にぶつかったり、昼も夜も掘り続けたカニはどんなことを考えているでしょう。	
	・もうだめだ、やめようかな。 ・どうしようかな、こまったな。 ・ここでやめたらたいへんだな。 ・まわりみちをしてもがんばろう。	・大きな岩を砕こうとする動作を反復していくことで、くじけそうになるカニの気持ちを想像できるようにする。（動作化） **◆自分がやろうと決めたことを続けるときの迷う気持ちに深く共感している。**
	池に水が流れ込んでいるのを見ているカニはどんな気持ちでしょう。	
	・がんばってよかった。 ・よろこんでもらえてよかった。 ・さかなたちがたすかるぞ。	・水が流れ込んでいく様子を場面絵、切り抜き絵により再現し児童とともに感動を作り出していく。
	3、今までの生活を振り返って話し合い手紙を書く。	**◆自分がやろうと決めたことを続けていこうとする気持ちをもつ。**
	カニさんのように目標に向かって最後までがんばったことはありますか。そのことを入れてカニさんにお手紙を書きましょう。	
	・ピアノの練習を毎日がんばったよ。 ・音読がんばってすらすら読めたよ。	・ワークシートを使用 ・自分の体験や気持ちを訴えるような内容になるように助言する。 **◆自分でしっかりやることは大切だと感じている。** **◆自分がやろうと決めたことを最後までやり通すことの大切さに気付いている。**
終末	4、教師の話を聞く。	・これからの実践と自己評価へつなげる。
	「こころのノート」の「がんばっているね」を見てお家の人と考えてみてください。	
		・「こころのノート」p16～p19 の活用を呼びかける。

（5）評価　カニの行動を通して、自分が決めたことは最後までやり通そうとする態度が育ったか。

◎実証授業の資料から

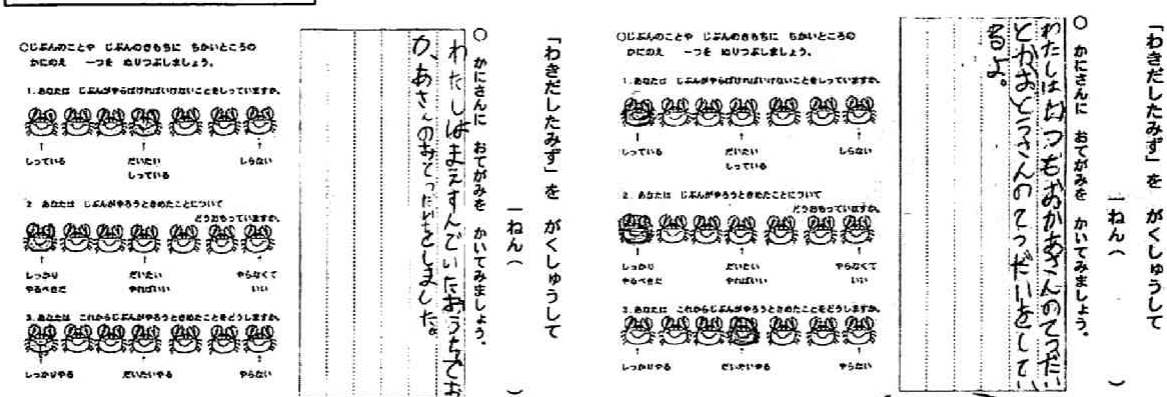
授業風景・資料提示



動作化を取り入れ、主人公(かに)の気持ちを考え、発表し合いました。

児童の興味を引くように資料提示は切り抜き絵を使いながら話しました。

児童のワークシートから



右側には自分ことを振り返りながら主人公に（かに）お手紙を書きました。左側は、質問紙と同じ選択肢で、選んで色を塗りました。資料の主人公の絵を使いました。

実態調査・把握の集計表

実態把握（参考例）

	氏名	実態把握（□観察・◎日記・◇聞き取り・係当番の取り組みなど）	自己評価 ☆☆☆☆☆☆☆ 7 6 5 4 3 2 1			ワークシートの記述から	見取り・その後
1		□てきとうな答えが多いが係活動は積極的に頑張っている。	7 7	1 4	1 1	たすけてあげてほんとうにたすかった。りんどうようちえんのときりれーでいちばんだった。	
3		◎掃除で友だちとおしゃべりしないで最後まで頑張る。	7 7	7 7	7 7	わたしは、おかあさんがかぜをひいているときにおてつだいをしているよ	係や当番の仕事にがんばっている。
5		□給食当番や掃除当番などの活動はまじめにやっている。	1 4	4 7	7 7		あいかわらずまじめに活動している。
10		◎ぼくは、これから風板係を頑張ります。	4 4	7 7	7 4	ぼくは、うちのままのおてつだいをやってるよ。	係の仕事をがんばるようになった。
15		◎係の風板頑張る、、掃除を頑張る。 ◇結構頑張っている。	4 4	4 7	7 4	ぼくは、さんすうのぷりんとをがんばったよ。	確実に係の仕事や当番お仕事に取り組むようになった
17		◎学校の勉強を頑張る。 ◇やらなければいけない仕事は頑張っている。	7 7	7 7	7 7	わたしは、おかあさんのおてつだいをいつもやっています。	
20		◇雑巾を持ってきていないため拭き掃除はやっていない。 □話を聞かないので自分のやるべきことが分からずにできないことが多い。	7 7	7 7	7 7	おそうじをてつだっている。	少しずつではあるが作業についていけるようになりつつある。

自己評価は、質問紙の選択肢で選んだものを数字化しました。左側から７・６～２・１の順です。また上段は事前の質問紙の記入、下段は本時のワークシートの記入です。

５．研究の成果と今後の課題

（１）研究の成果

①実態把握の工夫と活用

・日記や作文、観察、質問紙、聞き取りなど、多様な方法で児童の実態を把握したことにより、具体的な言葉かけや意図的指名に役立ち、ねらいとする価値に迫る指導と評価に生かすことができた。

・授業前と授業の展開後段における質問紙による調査内容を同じにしたことで、内容項目に対する心の変化や変容（状態）が見取りやすくなった。

②指導方法の工夫

・低学年に身近な主人公（動物などを擬人化したもの）が設定されている資料を選択したことで、より興味・関心を高めることができた。

・紙芝居や読み聞かせ、切り抜き絵などによる資料の提示方法は、ねらいとする価値への意識付けを行う上で有効であった。

・動物のお面を付けて動作化したり、役割演技をしたりしたことで、より深く登場人物の気持ちを考えることができ、振り返りの場に生かすことができた。

・価値に迫る発問や表現しやすいワークシートを工夫したことにより、児童の素直な心の表現につながった。

③評価の工夫

・評価の観点「気付いている」「感じている」「分かっている」「意欲をもっている」を明確にしたことで、一人一人の思いの深まり（＝変化・変容）や心の状態を見取りやすくなった。

・ワークシートの中に選択肢による自己評価項目（質問紙）を入れたことで、文章で表現できない児童にも、振り返りの場として、一人一人の思いを深める手立てとなった。同時に事前と学習後の心の変化・変容や状態を見取る上でも効果的な手法の一つとなった。

（２）今後の課題

・内容項目に合致した自己評価項目（質問紙）の言葉をさらに吟味していく必要がある。

・児童の自己評価と教師の見取りとの間にズレが生じる場合もあり、そのズレをどのようにとらえるかが課題である。

・低学年分科会では、評価の場を学習展開の全場面として考えたが、どこかの場面に絞った方が良かったのか、検討の余地が残る。

・児童一人一人の良い所を評価するために評価の観点を４つ設けたが、観点の言葉など妥当性については、今後研究を深めていく必要がある。

Ⅱ 友達とのかかわりの中で、互いに認め合う心を育てる指導と評価の工夫

— 考えを深め広げる話し合いを通して —　　（中学年分科会）

1．分科会主題設定の理由

中学年の児童の実態を見ると、集団の規則や遊びのきまりの意義を理解し、主体的にかかわったり、自分たちできまりをつくり守ろうとしたりするなど自主性が増してきている。また、個性を出し、それを伸ばし始めている。一方、周りに少しずつ目を向けられるようになっているものの、まだ自己中心的な行動をとる面もある。また、友達とのかかわりが十分でなく、自分に自信がもてず意見をなかなか言えない児童もいる。

この時期の人間形成に、友達とのかかわりが大きな影響を及ぼすことを考えると、学級集団の中で互いに認め合う場を作っていくことが大切であると考える。人は自分を振り返り自分のよさに気付いたり、自分とは違う相手のよさに気付いたりすることで、相手を共感的に受け止め互いを認め合う心が育つものである。その一つの場として、道徳の時間における話し合いに焦点をあて研究を進めることにした。

本部会では、話し合う場を意図的・計画的に取り入れた授業を積み重ねることで、相手の考えを受け止め、自分の考えを深めたり広げたりすることが、できると考えた。そのことを実現するためには内容の視点２「主として他人とのかかわりに関すること」に重点を置いて指導を進めることが適していると考えた。その中で多様な価値観に気付かせ、互いに認め合う心を育てていくことにした。

2．研究の構想

研究主題　児童の実態把握を的確に生かした指導と評価の工夫

目指す児童像　互いのよさや違いを認め、よりよい自分にしようとする子ども

分科会主題　**友達とのかかわりの中で、互いに認め合う心を育てる指導と評価の工夫**

仮　説　相手の考えを受け止め、自分の考えを深めたり広げたりする話し合いを重ねることで目指す児童像に迫ることができる。

指導・評価の工夫

1　実態把握を指導に生かす工夫	2　指導方法の工夫 **— 話し合いの工夫 —**	3　評価の工夫
①質問紙による調査の実施	①資料の選定	①ふり返りカード
・内容項目２の実態把握	②場と方法の吟味	・ワークシートの記述とふり返りの設問から
・話し合いの意識把握	１．役割を決めて話し合う	・「心のノート」の活用
・価値の自覚について事前・本時の把握	２．グループで話し合う	②評価の観点と観点に達するための手だての明確化
②日常の観察	３．相互指名で話し合う	・評価の観点の関係図
③活用しやすい記録の工夫	４．書いてから話し合う	
	③話し合いでの支援の観点の明確化	

３．研究主題に迫る指導と評価の工夫

（1） 実態把握を指導に生かす工夫（質問紙調査の実施）

① 内容の視点（主として他の人とのかかわりに関すること）について
② 学級での話し合い活動について
③ 道徳授業前の本時の内容項目に関する調査

① 内容の視点２（主として他の人とのかかわりに関すること）について

質問８項目を設け、調査をした。調査により学級全体や、児童一人一人の実態を把握した後、継続的に調査をすることで、変化や変容を見取ることができる。また、道徳資料選定のための手がかりとすることができる。

② 学級での話し合い活動について

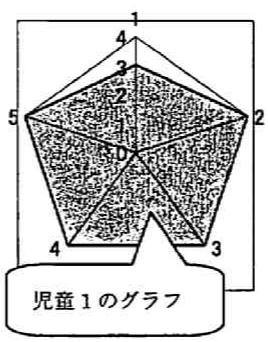
レーダーグラフについて

（五角形の外枠＝質問項目）
1・・・「話し合うことは好きか。」
2・・・「発言をするのは好きか。」
3・・・「発言をする時の気持ち。」
4・・・「意見を聞いているか。」
5・・・「意見を聞いてよく分かったり、考えが変わったりしたことがあるか。」

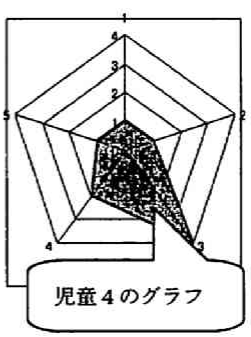
児童名＼項目	1	2	3	4	5
児童1	3	4	4	4	4
児童4	1	1	4	2	1

児童一人一人の結果をレーダーグラフに表し記録する。何回か質問紙調査を継続して行い、グラフに記録していくことで、児童の変化や変容を見取ることができる。

〔活用方法〕
- 授業における意図的指名に役立てる。
- 話し合いにより価値を自覚させるための手立てとする。
- 互いのよさや違いを認め合う活動を促す資料とする。

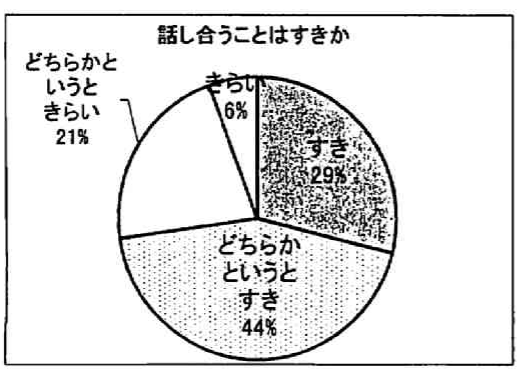


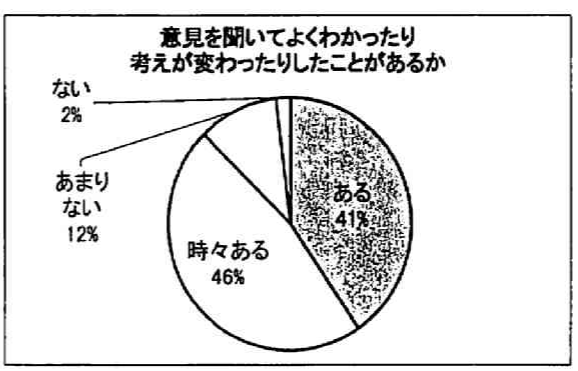
児童１のグラフ



児童４のグラフ

［中学年児童 214 名の調査］





③ 授業前の本時の内容項目に関する調査

・本時のねらいとする内容に沿った事前調査を行い実態を把握する。授業後、ワークシートや事後の質問紙調査から児童の様子を見取っていく。

(2) 指導方法の工夫 ―話し合いの工夫― ＜実践事例１，２における検証から＞

① どのような話し合いが効果的か考えながら資料を選ぶ。

・心の葛藤が捉えやすい資料、価値は同じだが異なる行為として表れている資料のように、二者の立場がはっきりしている資料は役割を決めて話し合うと効果的である。

※役割を決めて話し合うと効果的な資料の例

「なかよしだから　3年」「西川君のせい　4年」「絵はがきと切手　4年」

② 話し合う場とその方法を考える。

1 役割を決めて話し合う

実践事例２では、中心発問の前に二つの立場の思いを十分捉えさせるため第一の発問で話し合わせた。途中役割を交代することで兄･母それぞれの友達を思う気持ちを捉えられ、中心発問でひろ子の思いを深く考えることができた。

2 グループで話し合う

分科会での実証授業（「学校の帰り道」２－(2)）では、展開後段で親切にした経験をグループで発表し合った。全体の場ではなかなか発言できない児童も、少人数では話すことができ、その後「グループの人の話を他の人に紹介しよう」では、多くの児童が発言をしていた。どの部分で話し合うか、全体にどう広めるかを考えることが大切である。

3 相互指名で話し合う

実践事例１では、第二の発問で相互指名をしながら話し合わせた。児童がより友達の話を身近に感じながら聞くことができ、多様なまる子の気持ちに気づくことができた。

4 ワークシートに書いてから話し合う

実践事例１では、中心発問でまる子の気持ちを書かせることにより考えさせた。その後の話し合いでは、意図的な指名をすることで友達を大切にしていこうというまる子の気持ちを捉え、ねらいに近づくことができた。

③ 話し合いでの支援の観点を明らかにする。

児童の実態	児童への支援
● 発言がない	・友達の発言を聞いて、近い考えを見つけるよう促す。 ・考えがあっても発言できない児童には、少人数で話し合う機会を作り自信をもたせていく。
● 自分の考えにとどまっている	・自分の考えと比べながら聞くよう助言する。 ・多様な発言を板書し、参考にさせる。
● 友達の考えを受けて発言している	・さらに考えが深まるよう、話し合いを聞きながら自分の考えをまとめるよう助言する。 ・板書全体を見ながら価値についての考えを深めたり広げたりできるように、板書を工夫する。

（3）評価の工夫

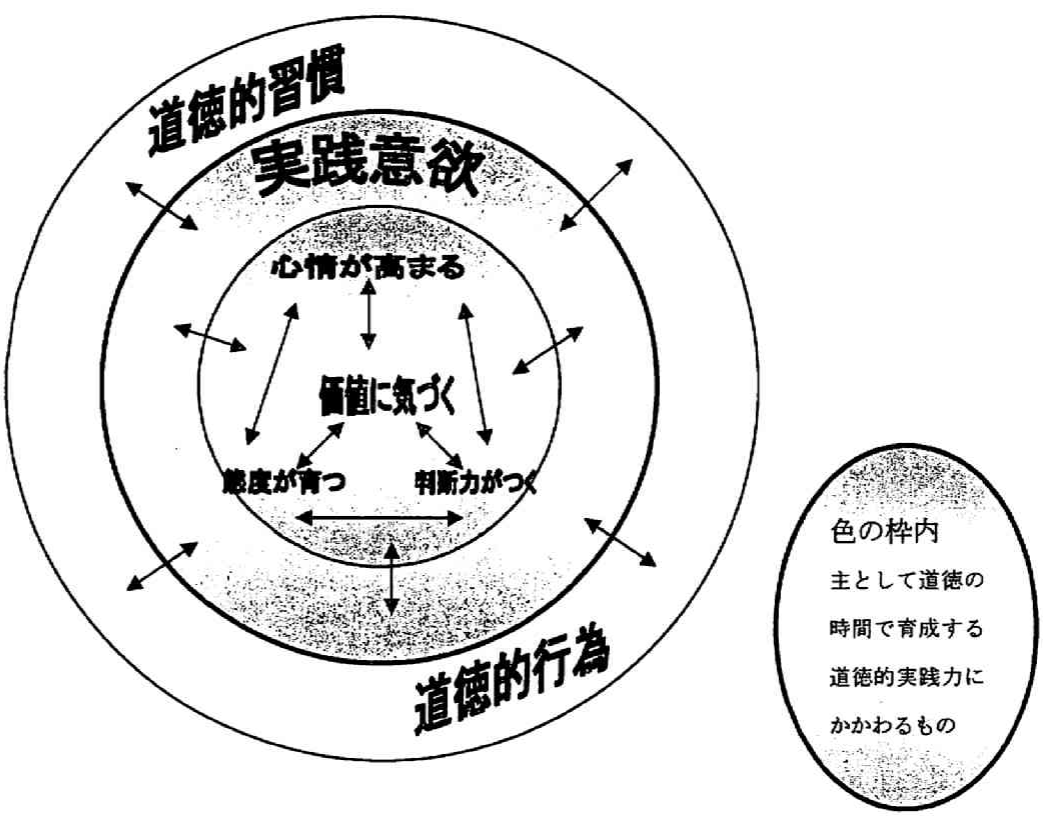
① 児童の変化や変容を事前の質問紙等の実態把握と本時のワークシートの記述をもとに捉え、事後の指導に生かす。中学年分科会では、話し合いへの意識の変容を追うために、ワークシートの最後に、自己振り返りの設問をつける。

② 評価の観点、観点に達するための手だてを明らかにする。

＜評価の観点表＞・・・「絵はがきと切手」内容２－（３）を例として

観　　点	観点に達するための手だて
価値に気づいている ・心から友達を思い、忠告し合うことは大切だと気づく。	・登場人物の気持ちを十分話し合わすことができるようにする。 ・展開前段の学習を板書等でふり返り、自分の心に響いた発言を思い出しながら書くよう促す。
心情が高まっている ・心から友達を思い、助け合い忠告し合っていこうと思う。	・登場人物の気持ちを十分話し合うことができるようにする。 ・友達の行動や気持ちを受け止めることができるようにする。 ・具体的な行為を取り上げて認め、賞賛する。
態度が育っている ・具体的な場面を想起して、友達のことを思って助けたり、忠告したりしようとする。	・展開後段で具体的な場面の価値ある行為を取り上げ、認めていく。 ・自分の体験を思い出させ、その時のことを書くことで価値と体験を結びつける。
実践意欲が高まっている ・学んだことを生かし、実践しようと意欲をもつ。	・感動を与える資料や考えさせる資料を使い、登場人物の気持ちを十分話し合うことができるようにする。 ・友達や教師の体験を聞き、その人の気持ちや思いを捉えさせる。

〈評価の観点の関係図〉



4．実践事例１　＜指導上の留意点①②③は、研究主題に迫る工夫(1)(2)(3)項目を表す＞

(1) 主題名　友達のよさ　（　第３学年　内容２－(3)　信頼・友情　）

(2) 資料名　「たまちゃん大好き」

(3) ねらい　友達と互いに理解し、信頼して助け合おうとする心情を育てる。

(4) 展　開

	学習活動　主な発問と児童の反応	◆評価の観点　◇指導上の留意点
導入	1　友達について思い出す。	
	友達とけんかした時のことを思い出してみましょう。その時どんな気持ちでしたか。	
	・遊びのことでけんかした。なかなおりできてよかった。	①観察・アンケートをもとに、具体場面を捉えておく。
展開	2　資料を視聴し、話し合う。	◇映像と読みを工夫し、資料に引き込む。
	たまちゃんが神社に来なかった時、まる子はどんな気持ちだったでしょう。	
	・早く来ないかな。 ・遅いな。何で来ないのかな。 ・約束したのにうそつき。大嫌い。	◇一枚絵をつかって、場面をつかませる。 ◇まる子の表情の絵を使い、心の動きが分かるような板書を工夫する。
	まる子は、「はっ」としたとき、どんな気持ちになったでしょう。	
	・ひどいこと言っちゃった。たまちゃんの気持ちを考えればよかった。 ・きっとたまちゃんも留守番しながら私のこと考えていたのかな。 ・大好きなのに、あんなふうに言っちゃってごめんね。 ・あやまって、カプセルを探そう。	◆たまちゃんに対するまる子の思いを自分なりに考えているか。 ②相互指名をしながら話し合うことで、多様なまる子の気持ちに気づかせる。
	土手でたまちゃんにだきついたまる子は、どんな気持ちだったでしょう。	
	・ごめんね。自分のことばかりでたまちゃのこと考えなかった。 ・仲直りできて良かった。これからも友達でいようね。 ・たまちゃんやさしいね。たまちゃん大好きずっとずっと友達でいようね	◆これからも友達を大切にしていこうというまる子の気持ちに共感しているか。 ③ワークシートに書くことでまる子の気持ちをじっくり考えさせる。（価値の自覚の見取り） ①座席用紙に記録しながら机間指導をし、助言する。また、それを意図的指名に生かす。 ②友達の発言を自分の考えと比べながら聞くように促す。
	3　自分を振り返り友達のよさを考える。	
	「友達がいてよかった。」と思ったのは、どんなときですか。	
	・病気で休んでいたとき、友達が見舞いに来てくれてうれしかった。 ・困っているとき、優しく声をかけて心配してくれた。 ・けんかで仲直りできなかった時、友達の方から謝ってくれた。	◆友達の発言を聞き、経験の多様性に気づいたか。 ①日常の観察の中から事例を用意する。 ◇児童の発言を補助し、友達の良さや大切さを感じさせる。
終末	4　教師の説話を聞く。	◇互いに信じて待っていたことが、その後、より信頼を深めることになった体験を語る。 ◆助け合おうとする気持ちが高まったか。

(5) 評　価

・友達の発言を聞いて自分の考えを深めたり、広げたりできたか。
・友達のことを考え、助け合おうとする気持ちが高まったか。

実践事例２　＜指導上の留意点①②③は、研究主題に迫る工夫(1)(2)(3)項目を表す＞

(1)　**主題名**　信頼のきずな　（　第４学年　内容２－(3)　信頼・友情　）

(2)　**資料名**　「絵はがきと切手」

(3)　**ねらい**　友達を信頼し、真心をもって友達を大切にしようとする心を育てる。

(4)　**展　開**

	学習活動　主な発問と児童の反応	◆評価の観点　◇指導上の留意点
導入	1　郵便物の大きさと料金のちがいについて知る。	
	定形外郵便物を知っていますか。	
	・料金がちがうなんて初めて知った。	◇実物を提示し、学習に興味をもつようにする。
展開	2資料を聞いて、話し合う。	◇場面絵を使い、間を取りながらゆっくり聞かせることで、資料への理解を深める。
	兄と母はどんな思いでひろ子に言ったのでしょう。	
	＜兄＞ ・正子は気づいていないのだから、教えるのが当然。 ・間違っているときは、はっきり言ってやろう。 ・正子ならわかってくれる。 ＜母＞ ・教えたら正子が傷つく。 ・正子の思いやりを大切にしたい。	②役割を決めて話し合わせることにより、兄と母の気持ちをつかませる。 ◆友達の発言を聞き自分の考えを深めているか。 ①② 話し合うことで、自分の考えを深められるよう、「話し合いでの観点」に従って支援する。 ＜３．研究主題に迫る指導の工夫　参照＞
	「やっぱり知らせよう。」と思ったひろ子はどんな気持ちでしょう。	
	・友だちだからこそ教えてあげたい。 ・きっと分かってくれると思うので、教えてあげたい。 ・言ってあげるのは正子のため。 ・他の人にも同じ事をしてしまうかもしれないから、教えてあげよう。	◆正子のことを考えたひろ子の気持ちが理解できたか。 ◇前の話し合いを振り返りながら考えるよう促す ◇正子のことを思って、真心をもって接しようとしているひろ子の気持ちを十分とらえるよう、言葉を添える。
	3　自分を振り返って考える。	
	友達のことを思って忠告したり、忠告してもらったことはありますか。その時、どんな気持ちでしたか。	
	・野球の時よけないでいいよと言った。（うまくなってほしい） ・うそを言わないでほしいと言った。（人を傷つけないでほしい） に来てくれてうれしかった。 ・困っているとき、優しく声をかけて心配してくれた。 ・けんかで仲直りできなかった時、友達の方から謝ってくれた。 4「友達を大切にする」ことについて考え、ワークシートに書く。	◆ 体験を振り返り、自分のこととして考えることができたか。 ①日常の観察の中から具体的場面を捉えて発言を促したり、実態把握から好ましい例を紹介する。（座席表活用） ◇ ワークシートに自分の考えを書くことで、友達を大切にすることについてじっくり考えさせる。 ③ワークシートから、道徳的価値の自覚の深まりを見取る。 ＜３．研究主題に迫る指導の工夫　参照＞
終末	4　教師の説話を聞く。	◇忠告してもらってよかったと思えた体験を語る。

(5)　**評　価**

・友達の発言を聞いて自分の考えを深めることができたか。
・友達のことを考え、真心を持って接しようとする気持ちが高まったか。

5. 研究の成果と今後の課題

（1） 研究の成果

① 実態調査を指導に生かす工夫

・内容の視点２について児童の実態を調査することにより、児童の価値への自覚や経験を捉えることができ実態に合った資料を選ぶことができた。また、調査を継続して行うことにより、指導による児童一人一人の変容を見取ることができ、指導方法の改善に生かすことができた。

・話し合いに関する実態把握を行うことで、意図的指名をより効果的に行うことができた。また、調査を継続的に行うことにより、友達の考えを受け止めたり、自分の考えを深めたり広げたりする意識を育てることができた。

・授業前に本時のねらいとする内容に関する調査を行い実態を把握することにより、授業の中で意識的な机間指導や指名を行うことができた。また、授業後のワークシートや事後の質問紙による調査との比較により児童の変容を見取ることができ、次の指導に生かすことができた。

② 指導方法の工夫

・児童の実態や資料に応じて、話し合いの方法を 4 つの形態で考えるとともに、話し合いでの児童の実態の捉え方と支援の観点を明らかにした。そのことによって、授業における話し合いが徐々に効果的に行われるようになってきた。児童はこのような話し合いを通して、友達の考えをしっかり受け止め、自分の考えを深めたり広げたりする力を徐々に身につけられるようになってきた。私たち中学年分科会は、児童が、自分も友達もそれぞれによさや違いをもっており、一人一人がかけがえのない存在であることを理解するとともに、より高い価値に向かって進んでいけることを目指してきたが、話し合いの工夫はそのことに大きく寄与することができたと考えている。

③ 評価の工夫

・ワークシートに、学習に対する意欲や話し合いに対する姿勢・価値への自覚など、自己を振り返る設問を作ることにより、児童が自分の変化や変容を意識できるようになった。

・評価の観点を明らかにすることにより、質問紙による調査で捉えた児童一人一人の実態をより詳しく把握することができた。また、それぞれの観点は単に段階的に進むものでなく、常にそれぞれの観点の間を行き来しながら高まっていくものであることがわかった。また、評価は指導後の新たな課題をつかむことであると捉えることができるようになった。

（2） 今後の課題

・中学年では、児童の実態などから内容項目の 2 について研究を進めたが、他の内容項目を取り上げた場合の実態把握の方法はどのようなものになるかさらに考える必要がある。

・評価の観点や観点に達するための手だては示すことができたが、それをそれぞれの児童に応じた見取りと関係づける方法もこれからの課題である。

Ⅲ　自分を振り返り、自他を大切にする心を育てる指導と評価の工夫

（高学年分科会）

１．分科会主題設定の理由

高学年になると、他者の行為だけでなく、自分自身の行為の善悪を客観的に判断できるようになる。また、その行為のもとにある心情も理解できるようになる。自分を振り返ることは、この時期の児童にとって、道徳的な価値の自覚を深めるために効果的であると考える。

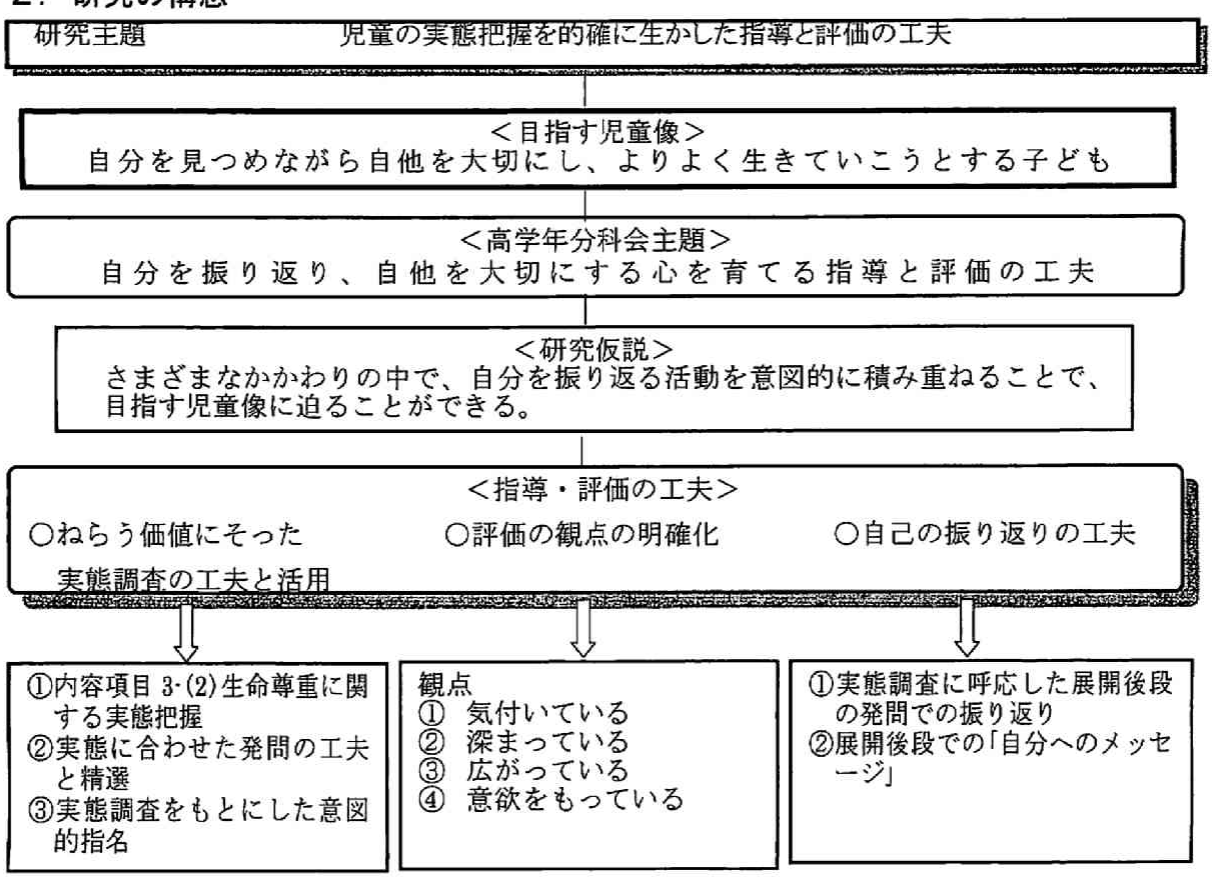
児童が、自分を振り返ることは、自分のことだけでなく、他者や自分を取り巻く環境・社会の存在を考えることと切っても切り離せない密接な関係がある。自分を振り返ることは、同時に他者や環境・社会とのかかわり方をも振り返ることであり、その際に培われる自分を大切にしようと思う心は、他者の存在や環境・社会をも大切にしようとする心につながっていく。自分を振り返ることを繰り返すことにより、自他を大切にしようとする心がはぐくまれていくのではないだろうか。

そこで、本分科会は、研究主題として「自分を振り返り、自他を大切にする心を育てる指導と評価の工夫」を設定した。ここでの「自他」の「自」とは自分自身のことであり、「他」とは、「他者」という意味合い以外に自分を取り巻く自然環境や社会集団という意味合いまで幅広くとらえている。

研究を進めるにあたっては、指導と評価の一体化を念頭におき、児童の実態の把握の仕方、評価の方法と観点に重点を置くこととした。

また、研究の深まりが評価できるよう道徳の時間のねらいを３－（２）生命尊重にしぼり、研究を進めることとした。

２．研究の構想



３．研究主題に迫る指導と評価の工夫

本研究主題「児童の実態把握を的確に生かした指導と評価の工夫」において高学年分科会では、まず、「児童の実態把握」について何をどのような方法で把握することが適切なのかを話し合った。そして、道徳の授業における児童の実態把握に大切なことは、ねらいとする内容項目に対して、現在の児童の心の状態がどうあるのかを捉えることが重要であると考えた。そこで実態把握をする方法として質問紙による調査を行い、その回答がどの評価の観点に当たるのか分析したことを「児童の実態」と捉えることとした。これは実態－指導－評価（実態）という授業を組み立てるための重要な一連の流れから考えた結論である。

（１）　ねらう価値にそった実態調査の工夫と活用

(1)　内容項目３－(２)生命尊重に関する実態把握
(2)　実態に合わせた発問の工夫と精選
(3)　実態調査をもとにした指導の工夫

①　内容項目３－(２)生命尊重に関する実態把握について

一時間の授業での児童の変化や変容を見取るために事前に行った実態調査の記述により児童の実態を把握しておく。実態調査の内容として『命についてどう思いますか』などの質問をし、端的な児童の思いを記述する。

実態調査の結果や日常生活上の様子などから児童一人一人を評価の観点にもとづいてどの状態にあるかを判断しておく。

＜実態調査の結果(例)＞

児童	命について思うこと	観点
1	命は大切だと思う	①
2	自分の命は自分だけのものではなく、家族にとってもかけがえのないものだと思う。	③
∫	∫	∫

①…気付いている
②…深まっている
③…広がっている
④…意欲をもっている

＊観点は、段階を表しているのではなく、その時の児童の心の状態を表しているものとする。

②　実態に合わせた発問の工夫と精選について

実態調査の結果から、中心発問での児童の心情の深まりを促すために資料のどの部分を中心発問とするかを検討する。また、じっくりと考えたり思いを深めたりする時間を確保するために発問の精選を行う。その時々に応じて補助的発問も行う。

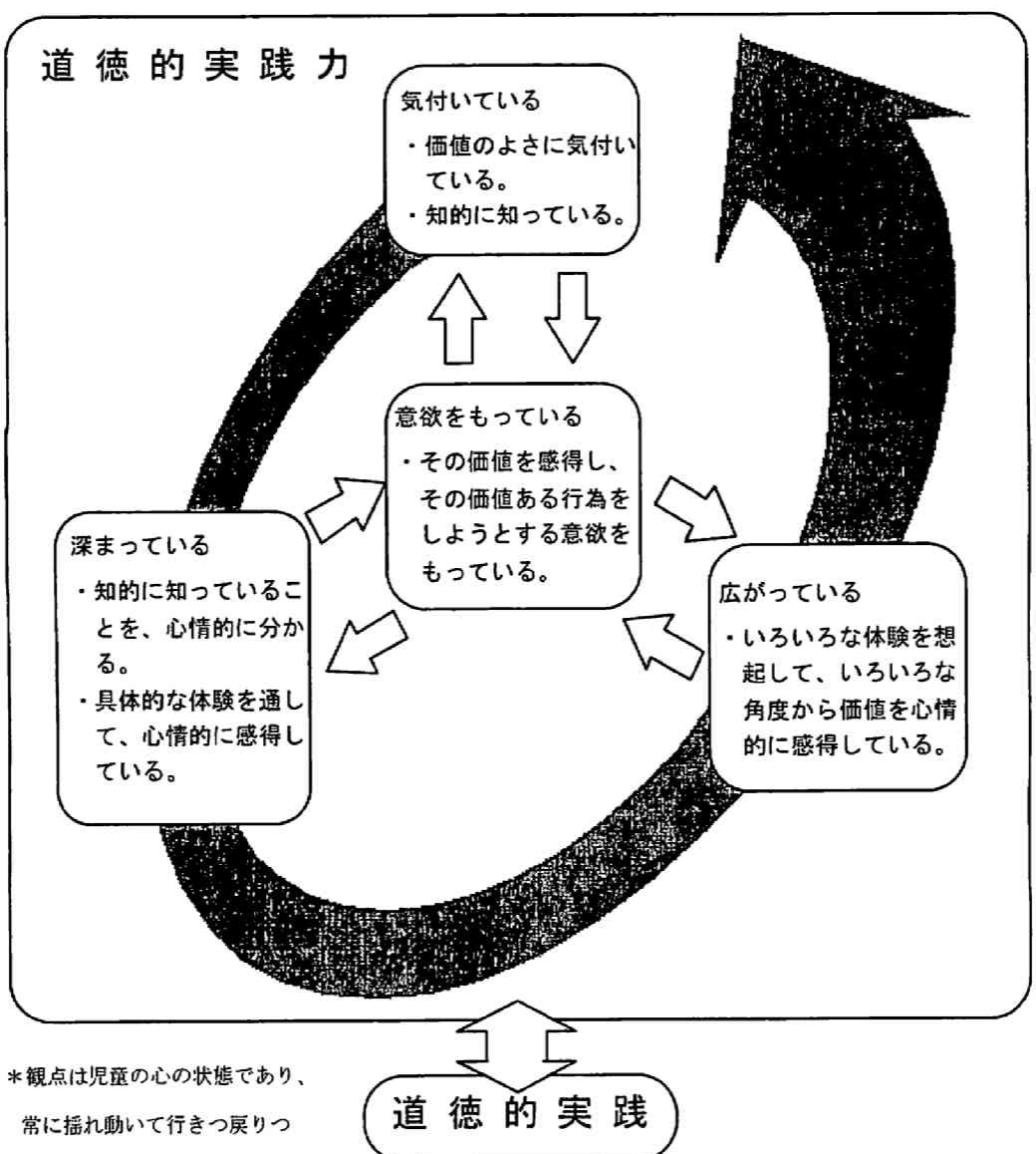
③　実態調査をもとにした指導の工夫

実態調査で把握したことをもとに、机間指導、意図的な指名、切り返し等を行う。

（２）評価の観点の明確化

道徳的な価値の自覚の深まりをつかむ手立てとして、事前の実態調査と授業時の展開後段で記述したワークシートを比較することにより、児童の変化や変容を見取るてがかりとすることができる。評価の観点に照らして児童が価値に対してどのように自覚しているかを判断することにより、児童の発言に応じた指導や、意図的指名、切り返しの発問を行うことが効果的にできる。

質問紙やワークシートにおける児童の変化や変容の見取り



＊観点は児童の心の状態であり、常に揺れ動いて行きつ戻りつしているものと考える。

評価の観点と内容項目３―（２）における児童の意識の例

観点	具体的な児童の意識	指　　導
気付いている	（漠然と）命は大切だと思う。	・「命はかけがえのないものだ。大切なものだ」ということを資料での展開を板書等で振り返り、感じられるようにする。
深まっている	飼っている動物が死んでしまった時、どんなに悲しんでも命は戻ってこないかけがえのないものだと思った。	・自分とのかかわりの中での具体的な体験を想起させ、「命はかけがえのないものだ」という価値と体験を結びつけて感得できるようにする。
広がっている	・自分の命は自分だけのものではなく、家族にとってもかけがえのないものだ。（死の重さと誕生の喜び） ・自分の命だけでなく他人の命も同じようにかけがえのないものだと思う。 （自他を含めたいろいろな命） ・生きているからこそいろいろな体験ができる。生きていることは素晴らしい。（生きていることの尊さ）	・死の重さだけでなく、誕生の喜びからも命がかけがえのないものであることを捉えることができるようにする。 ・自分の命も他者の命も生きている全てのものの命も同じように大切なものであることを捉えることができるようにする。 ・生きていることの素晴らしさを体験を想起させることで捉えることができるようにする。
意欲をもっている	・自分だけでなく、他の人の命も大切にしていきたい。	・命を大切にしたいという思いを共感的に受け止め、具体的にどんなことをしたいか、投げかける。

（３）自己の振り返りの工夫

(1)　実態調査に呼応した展開後段の発問での振り返り
(2)　展開後段での「自分へのメッセージ」

①　実態調査に呼応した展開後段の発問での振り返りについて
展開後段で児童自身が自己評価できるワークシート(振り返りカード)を使用し、実態調査時の質問内容と同じ内容で記述することで児童自身による自己評価ができる。
②　展開後段での「自分へのメッセージ」について
展開後段で授業前の自分に対して伝えたいことを自分へのメッセージとして記述することにより、児童自身が一時間の授業での自己の変化や変容を自覚し、どのようなことを学んだのか自己評価できるようにした。（「振り返りカード」と「自分へのメッセージ」は、同時には使用しない。）

（４）　評価の工夫

道徳的な価値の自覚の深まりを知る手だてとして、事前の実態調査と授業時の展開後段で記述したワークシートを比較することにより、児童の変化や変容を見取るてがかりとすることができる。評価の観点に照らして児童が価値に対してどのように自覚しているかを判断することにより、児童の反応に応じた指導や、意図的指名、切り返しの発問を行うことが効果的にできる。

4，実践事例 1

（1）主題名　かえらぬ命　（ 第６学年　３－②生命尊重 ）

（2）資料名　「しゃぼん玉」

（3）ねらい　生命はかけがえのないものであることに気づき、生命を大切にしようとする心情を育てる。

（4）展開

	学習活動　主な発問と児童の反応	◆評価の観点　・指導上の留意点
導入	1、「しゃぼん玉」の歌を聴く。 この歌について知っていますか。	・学ぼうとする構えができるように資料を提示し、視聴覚教材を使用する。
展開	2，資料「しゃぼん玉」を読んで、話し合う。 雨情はどんなことを思いながら、しゃぼんだまを買ったのでしょうか。 ・子供は元気だろうか。 ・早く会いたい。　・何をおみやげにしよう。	・父親の子どもに対する愛情の深さが十分考えられるように教師が朗読する。
	死んでしまったくまおを見つめながら、雨情はどんなことを思ったのでしょう。 ・どうして死んでしまったのか。 ・できることなら目を開けてくれ。 ・生きている間にもっとたくさん遊んであげればよかった。	・発問カードと場面絵を掲示する。 ・雨情の息子を失った悲しみが十分考えられるようにする。
	雨情は、この詩にどんな思いをこめましたか。 ・屋根までとんでいけるように元気に大きくなってほしかった。 ・いつまでも息子のことを忘れないように歌にその思いを込めた。 ・息子の命をしゃぼん玉にたとえている。	・発問カードを提示する。 ◆雨情のこの詩に込めた思いを感じることができたか。 ◆友達の多様な考え方に気づくことができたか。
	3，自分自身を振り返り、生命について考える。 資料での話し合いを通して、命についてあらためて思うこと、感じたことを書きましょう。 ・一人が死んだら、みんなが悲しむ。 ・お金で買えないたった一つのものだから、大切にしなければいけない。 ・命はたくさんあるけれど一つ一つが大切だと思った。	・ワークシートを活用する。 ・事前の質問紙を補助的に活用する。 ◆事前に書いた質問紙と比べて、授業を通して自分の考えがどのように変化や変容したか自覚できたか。（自己評価を生かした評価）
終末	4，教師の話を聞く。	・児童の発言を受け、投げかけで終わる。

（5）評　価

・生命を大切にしようとする心情が高まったか。

実践事例 2

（1）主題名　　生きることのすばらしさ　　（ 第５学年　３－②　生命尊重 ）
（2）資料名　　「お母さんへ」
（3）ねらい　　生命のかけがえのなさを知り、大切にしようとする心情を育てる。
（4）展開

	学習活動　主な発問と児童の反応	◆評価の観点　・指導上の留意点
導入	1．資料についての簡単な説明を聞く。	・ねらいとする価値への方向付けをする。
展開	2．資料を視聴し、話し合う。	・ＢＧＭを使い、教師が朗読することで資料に充分浸れるようにする。
	この作文を読んで、佐江子さんのどんなところが心に残っていますか。	
	・「手術がんばろうね」から希望を感じ、どうしても生きたいという気持ち。 ・明るく前向きに頑張ろうとしている。 ・お母さんなんか私の気持ち分かっていないと言ってたが、ありがたみがわかった。	・佐江子さんの生き方から、さらに心情へとせまれるように、次の補助発問をする。
	手術の三日前に、佐江子さんは「お母さんへ」の手紙をどんな気持ちで書いたのでしょう。	
	・お母さん、今までありがとう。 ・手術は恐いけれど、お母さんが一緒だから頑張るよ。 ・治ったらたくさん親孝行したい。	・佐江子さんの複雑な心境を共感的に理解できるようにし、更に常に希望を持ち続けた生き方について感得できるようにする。
	手術室へ向かう佐江子さんは、どんな気持ちだったのでしょう。	
	・もしかしたら、死んでしまうかもしれない。でも命の限り頑張るよ。 ・絶対に手術は成功すると信じているよ。 ・私も元気にみんなと同じ生活ができるようになりたいから、恐いけど頑張る。 ・私も頑張るからお母さんも頑張って。 ・私は大丈夫だからね。 ・治ってからの楽しいことを考えている。 ・本当はダメかもしれない。	・お母さんに心配かけまいとして、強い姿勢を見せてはいたが、本当は手術がとても不安な佐江子さんの心境に共感できるようにする。 ・評価の観点が「広がっている」の実態だった児童を意図的に指名し、「気付いている」や「深まっている」の児童に対して価値への自覚を促す。 ◆佐江子さんの気持ちに共感することができたか。 ◆友達の多様な考え方に気付くことができたか。
	3．自分の生活を振り返り、命について考える。	・自分の生活を振り返ることがスムーズにできるよう実態調査の結果について話す。
	今、自分が「生きていること」についてどう考えるか、授業を受ける前の自分にメッセージを書きましょう。	
	・いつかは自分も死ぬのかと思うと恐い。しかし精一杯生きて、悔いのない人生を送ろうね。 ・今まで君は生きていることは当たり前だと思っていたね。でも命はいつ消えてしまうかも分からないものだから大切にしよう。 ・ただ何となく生きているよね。でもお父さんとお母さんにもらった大切な命なんだよ。家族を悲しませたりしないようにしっかりと生きていこうね。 ・命のことをあまり考えたことなかったね。でも命ってすごく大切。だから簡単に「死ね」とか言っちゃダメだよ。	◆授業前の自分自身を振り返り、授業を受けて自分の考えがどのように変容したか自覚できたか。 （自己評価を生かした評価） ◆ねらいとする道徳的価値への自覚が深まったか。 （教師の評価） ・ワークシートから、道徳的価値の自覚の深まりの変容を見取る。 ・価値への自覚の深まりが変容した児童を意図的に指名し、発表させることで、ねらいとする価値を他の児童に広げる。
終末	4．相田みつをの詩を読む。	

（5）評価
・生命のかけがえのなさを知り、大切にしようとする心情が育ったか。

５．研究の成果と今後の課題

（１）研究の成果

①ねらいとする価値にそった実態調査の工夫と活用

・質問紙を用いて、ねらいとする内容に絞った実態調査ができたので、児童の心の状態が現在どの観点にあるのかについて一人一人に応じてつかむことができた。

・実態調査により学級全体の傾向を、より的確にとらえることができたので、その実態に合わせた発問を精選しじっくりと考えさせる考えることができた。

・実態調査を行ったことで、発問に対する意図的指名が効果的にでき、指名された児童の発言により他の児童も深まったり広がったりすることができた。（友達の多様な考えに対する気付き）

②評価の観点の明確化

・評価の観点を明確にしたことは、児童がねらいとする価値に対してどのように自覚しているのかを見取るための窓口として有効であった。

③自己の振り返りの工夫

○実態調査とワークシートの質問を同じにしたことの成果

・実態調査と授業でのワークシートの質問を同じにすることで、児童自身が自分の考えの変容に気付くことができた。

・明確にされた観点にそって、後段のワークシートを見取ることにより、効果的な机間指導ができた。

○授業前の自分自身へのメッセージの成果

・ねらいとする価値に対する自分自身の自覚を客観的に見ることができ、自分自身の変化や変容に自分自身で気付くことができた。

・自己内対話により価値への自覚を自分自身の中で更に深めることができた。

（２）今後の課題

・内容項目をしぼって、評価の観点を設定したが、他の内容項目にも共通する観点を開発する。

・評価の観点の言葉（「気付いている」「深まっている」「広がっている」「意欲をもっている」）は適切であるかどうかについて、更に検討していく。

・高学年分科会では展開後段での振り返り部分に評価を絞って研究を進めてきたが、導入や展開前段において、児童の様子をどのように見取り、評価していくのか研究を深めていく。